

---

# ポケットの宝物

小十郎

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ポケットの宝物

### 【Nコード】

N1423C

### 【作者名】

小十郎

### 【あらすじ】

お母さんが天国にいったことを理解できない竜太。しかし、気づくときが来る。そして、ちょっと大人に。

「お母さん、お母さん、どこにいるの。公園行こうよ」  
竜太は、二階からドタンバタンとかけ下りると、部屋中探し回った。

父さんを見つけ、竜太はかけよる。

「ねえねえ、お母さんは？」と、つぶらな瞳で父さんにたずねた。  
父さんの顔は、見えない糸にでも引つ張られているみたいなきつつた表情をしていた。

「竜太、お母さんは、もういないんだよ。昨日、天国に旅立ってしまっただからね」

「そうなの。いつ帰ってくるの」

「……」

竜太は、天国という場所があると思っていた。

父さんは、そんな竜太のことをギュッと抱きしめ、ポロリと涙をこぼす。

「お父さん、苦しいよ。ねえ、どうしたの。泣いているの」

「ごめん、ごめん、もう大丈夫だから」

父さんは、竜太の頭をなでて、ニコツと笑って見せた。

「そうだ、竜太、水族館に行くか。好きだったろ、お母さんあそこのイルカ見に行くの」

「うん、でも、お母さんいないんだよね」

「いいんだよ。もしかしたら、お母さんも天国から来てくれるかもしれないだろ」

「うん」

ちよつと、うつむきかげんで返事をする、竜太は、ポケットから、青いビー玉を取り出してながめていた。竜太にとってそれは、母さんにもらった大事な宝物だった。

「お母さん、来るといいな」

竜太は、ビー玉をみつめつぶやいた。

二人は、手をつないで、母さんの思い出のある水族館に向かう。

竜太は、キャツキヤ、キャツキヤと大はしゃぎ。父さんは、そんな竜太の無邪気な顔を見ているだけで、いやなことを忘れることができた。

「ほら、着いたぞ」

「イルカのとこ行こう」

竜太は、父さんの手をひっぱり奥に向かう。

「イルカさんだ」

水槽の中には、イルカさんが行ったりきたりと楽しそうに泳いでいる。

父さんは、竜太の顔ばかり見ていた。

「あつ、お母さんだ」

竜太のその一言で、お父さんは、ビクツとなり、かなしばりにあつたようにかたまつてしまった。

水槽に目を移したお父さんにも、はっきりと母さんの姿が見えたからだ。大きな水槽の中で、イルカと一緒にあって、スイスイと人魚のように泳いでいる母さんがそこにいた。竜太は、瞳をキラキラと星のように輝かせて見ていた。

「き、きれいだ」

父さんは、周りの人のことも気にせず、おもわずそう口走っていた。竜太は、水槽のガラスにぴったりとキュウバンのようにくっついて、お母さんを目で追っていた。その竜太にひかれるように、母さんが、竜太の目の前にやってきた。

「竜太、いい子にしてる」

「うん、ぼくいい子だよ。ねえ、お父さん」

「ああ」

父さんは、母さんの笑顔に見とれている。

「竜太、お母さん、もつともつと、一緒にいたかったな。でも、神様が、それを許してくれなかったみたい。きつと、お母さん、何か

いけないことしちゃったのかな」

竜太は、母さんが、何を言っているのかよく分からなくて、首をかしげた。

「うふ、竜太には、分からないか。お父さん、竜太をよろしくね。私、もう、行かなきゃ。愛しているわよ、さよなら……」

「あつ、いつちやヤダ」

竜太は、泣きべそをかいていた。

竜太の心に、別れという文字が浮かんできたからだ。もう会えないという思いが込み上げてくる。

「竜太、泣かないの。男の子でしょ。お母さんは、いつまでも、竜太と一緒にだからね。いつまでも……」

母さんの体が、だんだん水と同化していく。母さんが水になる。

母さんの最後の笑顔が消えた瞬間、その場所に、ブクツと小さなあぶくができて、シャボン玉のようにふわふわとただよう。

あぶくは、竜太のもとに近づこうとして水槽のガラスにふれ、ペチンとはじけた。

そのとき、竜太のポケットから、ほんわかと母さんに抱かれたときのよな暖かさを感じた。

ポケットに手をつ突っ込むと、ボワーンと、淡い光をおびたビー玉が。まるで、母さんの心が、ビー玉にのりうつったかのよう。

「お母さん」

このビー玉は、世界で一個のかけがえのないものになった。

「お父さん、もう帰ろう」

竜太の目は、うるんでいた。でも、竜太は、胸をはって力いっぱい歩きだした。

この日を境に、甘えん坊な竜太はいなくなった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1423c/>

---

ポケットの宝物

2010年10月9日02時36分発行